

# 平安朝漢詩の展開

—『新撰万葉集』漢詩と道真詩に詠まれた蜘蛛の糸—

リョウ セイ  
梁 青

## はじめに

寛平五年（八九三）の成立と伝えられる『新撰万葉集』は、和歌ごとに七言四句の漢詩が配される和歌集である。その序文に撰者の名が記載されていないが、『日本紀略』（寛平五年九月二十五日条）に「菅原朝臣撰進『新撰万葉集二卷』」とあるように、古来菅原道真が編纂し奉進されたものとされる。そして『新撰万葉集』の漢詩作者を道真とする説もある<sup>①</sup>。

道真が生きていた九世紀末、勅撰和歌集撰進の気運が次第に醸成されてきた。国風意識の高まりに伴って、この時期の日本漢詩は単なる中国詩の模倣にとどまらず、日本の風土に合わせて創作したり、漢籍の摂取において取捨選択したりして独自の方向を模索しはじめたのである。近年来、菅原道真の漢詩において「和習」と言われてきたことを日本文学の展開の道筋に立って再評価しようという傾向がある<sup>②</sup>。本稿はこの立場に立って、『新撰万葉集』上恋 108 と菅原道真の「暁月」詩における特異な蜘蛛の糸の詠み方を考えてみる。それによって、平安初期漢詩の日本的展開の一端を明らかにしたい<sup>③</sup>。

## 一. 『新撰万葉集』漢詩における蜘蛛の糸

上恋 108 恋しとは今は思はじ魂のあひ見ぬほどに成りぬともへば

消息絶来幾数年、消息絶え乗りて 幾数年ぞ

昔心忘却不須憐。昔の心忘却して 憐れむことを須みず

閨中寂寞蜘蛛綸乱、閨中寂寞として 蜘蛛乱れ  
粉黛長休鏡又捐。粉黛長く休め 鏡も又捐てたり

恋の終焉に位置付けられる上恋 108 の和歌に対応している漢詩は、〈男の便りは長い間途絶えて、昔の心を既に忘れてしまう。閨の中で独り暮らして寂しくて、蜘蛛の糸が乱れている。化粧もやめ、鏡も捨ててしまう〉という内容となる。泉紀子氏が「新撰万葉集に多く看取される〈荒れた部屋に蜘蛛が飛び、粧う事も忘れた今、塵の積もった鏡を眺める気にもならず、ひたすら溜息をつき、眉を顰めたり、涙したりする〉女の状況、動作も、『玉台新詠』にやはり多く看取される閨怨詩の方法である」<sup>④</sup>と指摘したとおり、第三句目の「閨中寂寞蜘蛛綸乱」は閨房の苦悩を表現するために用いられる常套表現であるが、「蜘蛛綸」という語は未見である。『説文解字』の「綸」の項に「糾<sub>レ</sub>青糸<sub>一</sub>、綸也」と見えるように、「綸」が糸関係の言葉であることから、「蜘蛛綸」が「蜘蛛糸」から作り出された造語と推測される<sup>⑤</sup>。そして、中国閨怨詩における蜘蛛の糸の例を挙げると、

青苔依<sub>二</sub>空牆<sub>一</sub>、蜘蛛網<sub>二</sub>四屋<sub>一</sub>。

(『文選』卷二、張景陽・雜詩)

蘭逕少<sub>二</sub>行跡<sub>一</sub>、玉台生<sub>二</sub>網糸<sub>一</sub>。

(『玉台新詠』卷五、張華・離情)

蜘蛛作<sub>レ</sub>糸滿<sub>二</sub>帳中<sub>一</sub>、芳草結<sub>レ</sub>葉当<sub>二</sub>行路<sub>一</sub>。

(『玉台新詠』卷九、簡文帝・和<sub>二</sub>蕭侍中子顯春別<sub>一</sub>)

とある。蜘蛛はよく人が訪れない荒廃した部屋の点景として詠まれるが、蜘蛛の糸が乱れるという詠み方は閨怨詩の通例から外れてしまう<sup>⑥</sup>。閨怨詩以外の用例に求めてみると、

鐵羅絡莫、綺錯交張。

(『芸文類聚』卷九七・鱗介部下・蟲豸部、晋・成公綏・蜘蛛賦)

網密將求<sub>レ</sub>食、糸斜誤著<sub>レ</sub>人。

(『全唐詩』、中唐・元稹・虫豸詩・蜘蛛)

露珠虫網細、金縷兔糸長。

(『全唐詩』、中唐・沈亞之・汴州船行賦<sub>二</sub>岸傍所見<sub>一</sub>)

といった例に端的に示されるように、蜘蛛の糸の多さ、細さ、密で交錯する様などは多く描かれるが、乱れる蜘蛛の糸という表現は容易には見出し難い。<sup>⑦</sup>

上恋 108 の「閨中寂寞蜘蛛亂」における蜘蛛の糸は荒れ果てた宿を象徴するだけでなく、千々に乱れる心をも表す。『新撰万葉集』にはほかに、「乱」の用例が次の二首ある。

上秋 61 戸牖荒涼蓬草乱、毎<sub>レ</sub>秋鎮待<sub>二</sub>雁書遲<sub>一</sub>。

上恋 103 歎息高低閨裏乱、含<sub>レ</sub>情泣<sub>レ</sub>血袖紅新。

中国閨怨詩では、訪れ人がいないので、寝台に塵が積もったり、庭の草が茂ったりする描写が屢々見られるが、「蓬草乱・閨裏乱」のような表現は中国詩の中に見つけられない。そのような試みを行った背後には、荒れ果てた宿を形容する伝統的表現にすこし工夫を加えて、景情一体の表現を目指そうとする意図があるのではないかと思われる。<sup>⑧</sup>

六朝閨怨詩では蜘蛛に寄せて独り暮らしの寂しさを表すが、蜘蛛の糸は作中人物の心情に渾然と融合したものではない。それでは、上恋 108 における蜘蛛の糸と心情が一体化した表現はいったいどこから来たのであろうか。中国詩には、思い乱れている心を乱糸に喩える漢詩が少なからずある。

楊柳乱成糸、攀折上春時。

(『芸文類聚』卷第八九・木部下、梁・簡文帝・折楊柳)

心緒乱如糸、空懷疇昔時。

(『先秦漢魏晉南北朝詩』、隋・孫万寿・遠戍江南、寄京邑親友)

とあるように、「糸・思」の双関語を駆使して、乱れる糸と乱れる思いが完全に融合するようになる。この「糸・乱・思」の縁語的表現は主に樂府詩に用いられ、「糸」は普通織物の糸、青柳の糸、蠶の糸の類を指す。蜘蛛の糸について言う場合は極めて少ない<sup>⑨</sup>。上恋 108 はこの縁語的表現を踏まえながら、通常の「青柳の糸・繊維の糸」を蜘蛛の糸に置き換えることによって、景情一体の表現が作り出されている。

## 二 道真の「暁月」詩における蜘蛛の糸

寛平三年(891)、菅原道真是「蜘蛛の糸」に関する応製詩を作りあげた<sup>⑩</sup>。その作詩時期は『新撰万葉集』漢詩(893年)に極めて接近する。

何処粧樓擲玉環、何れの処の粧樓か 玉環を擲つ

一明一暗暁雲間。一たび明るく一たび暗し 暁雲の間

秋腸軟自蜘蛛縷、秋腸は蜘蛛の縷よりも軟らかく

寸寸分分断尽還。寸寸分分 断ち尽して還

(『菅家文章』卷五・355、暁月、応製)

前二句は、暁の月を美人の玉環に喩えて、月が雲の間に隠見する様を詠んでいる。後二句では、秋の月を眺めて物思いにふける孤独な心が描き出されている。転句にある「蜘蛛縷」は他に例を見ない表現である。それは『西京雜記』(卷一)「中設木畫屏風、文如蜘蛛糸縷」における「蜘蛛糸縷」の略語か、或いは「蜘蛛」と同じ「蜘蛛糸」からの造語であろう。また、当詩には中国の

悲秋詩の大きな影響が看取できる。「腸…寸寸分分断尽還」は腸がずたずたに断ちきれれるほどの悲しさを表し、「涙臉千行、愁腸寸断」（『遊仙窟』）のように、その用例は枚挙に暇がない。「秋腸…断」は「大抵四時心総苦、就中腸断是秋天」（『白氏文集』790・暮立）を想起させる<sup>⑪</sup>。また、「腸断青天望<sub>二</sub>明月<sub>一</sub>、別来三十六回圓」（『白氏文集』1206・三年別）のように、秋の月を見れば物思いをしたのも悲秋の常套表現である。とはいえ、「暁月」における秋の断腸の思いは、しみじみとした情趣と哀感というべきもので、秋を人生的な衰えに重ね嘆く中国の悲秋詩と少し違う。

ここで注意したいのは、蜘蛛の糸を断腸の思いに喩えることと、蜘蛛の糸の軟らかさの形容は中国詩や以前の日本漢詩に先例を持たず、道真の独創によることである。道真に大きな影響を与える白居易には、切られた糸を断腸の思いに喩える漢詩がある。

人言柳葉似<sub>二</sub>愁眉<sub>一</sub>、更有<sub>三</sub>愁腸似<sub>二</sub>柳糸<sub>一</sub>。

柳糸挽断腸牽断、彼此応無<sub>二</sub>続得期<sub>一</sub>。

(3145、楊柳枝詞)

絶弦与断糸、猶有<sub>二</sub>却続時<sub>一</sub>。

唯有<sub>二</sub>哀腸断<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>応続得期<sub>一</sub>。

(0791、有<sub>レ</sub>感)

とある。一首目は、柳の枝を折って旅立つ人に贈って別れたという風習を基にした古楽府詩題「折楊柳」を踏まえて、青柳のしなやかな枝がひっぱってちぎれるのを心腸が引き裂かれることに喩えて、癒せない悲しみを詠んだものである。二首目の詩は、「絶弦・断糸」を「断腸」と比較して、切れた断糸をつなぐことができるが、引きちぎられた哀しみは二度と癒されることはないだろうと詠んでいる。二首における「断…無続得期」という語句は、道真詩の「断尽」に類似している。中唐孟郊の「去婦」に「妾心藕中糸、雖<sub>レ</sub>断猶牽連」と

見えるように、蓮根を切っても糸を引くことを、女が棄てられてもまだ夫に未練があることに喩える例もあるが、道真詩と白詩との密接な関係を考えてみると、その表現の原拠の一つに白詩の存在が考えられよう。そして、『白氏文集』「一樹春風千万枝、嫩<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>金色軟<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>糸」(3636・永豊坊西南角園中有<sub>二</sub>垂柳一株<sub>一</sub>柔条極茂〈後略〉)「青門柳枝軟無<sub>レ</sub>力、東風吹作<sub>二</sub>黄金色<sub>一</sub>」(1198・長安春)と見えるように、「軟」はよく青柳の糸の形容に用いられている。「軟自蜘蛛縷」は恐らく白詩の「(柳枝)軟於糸」を学んだ結果だろうと推測される<sup>12)</sup>。

上の分析により、「暁月」詩における〈断腸一軟一断れた蛛糸一断ち尽す〉は白詩の〈断腸一軟一柳糸挽断・絶弦・断糸一続き得る時なし〉という表現から派生したことがわかる<sup>13)</sup>。道真は切れた糸、乱れた糸に寄せて心情を表現することを好んだようである。『菅家文草』には、

葉遮鬢更乱、糸剪腸俱絶。

(卷一・7、賦<sub>二</sub>得折楊柳<sub>一</sub>)

懷抱此間機緒断、生涯誰見鬢邊糸。

(卷一・178、園池晚眺)

秋思如<sub>レ</sub>糸乱不<sub>レ</sub>従、低迷暗入<sub>二</sub>殿前松<sub>一</sub>。

(卷六・449、九日後朝、侍<sub>二</sub>宴朱雀院<sub>一</sub>、

同賦<sub>二</sub>秋思入<sub>二</sub>寒松<sub>一</sub>、応<sub>二</sub>太上皇製<sub>一</sub>)

等の例が見える。細い柳の糸が切られるとともに腸も絶えてしまう、胸の中の思いは機織の糸が断ち切れるように絶たれる、秋の物寂しい思いが糸のように乱れる、とあるように、道真は従来糸の縁語的表現に大きな関心を持っている<sup>14)</sup>。それゆえに、本来青柳、繊維等に限られている「絶・剪・断・緒・乱」という糸の縁語的表現を積極的に蜘蛛の糸の上に表現したのであろう。

なお、前代の日本漢詩と和歌の影響についてもすこし触れたい。中国詩と上

恋 108・「暁月」との間に、道真以前の日本漢詩が介在していることを見逃してはならない。<sup>15)</sup>

三秋三五夜、夜久夜風涼。虫網露懸白、樹條葉未レ黄。

(『凌雲集』50、良岑安世・早秋月夜)

定識<sub>二</sub>幽閨女<sub>一</sub>、執<sub>レ</sub>梭織<sub>二</sub>錦章<sub>一</sub>。破簾虫網薄、危牖月光涼。

(『経国集』159、丹治比文雄・五言、奉<sub>レ</sub>試、賦<sub>二</sub>秋興<sub>一</sub>)

秋寒綴<sub>レ</sub>露牽<sub>二</sub>珠貫<sub>一</sub>、風拂黏<sub>レ</sub>花動<sub>二</sub>綵帷<sub>一</sub>。

(『田氏家集』67、島田忠臣・見<sub>二</sub>蜘蛛作<sub>レ</sub>網<sub>一</sub>)

上恋 108 の閨怨と蜘蛛との組合せ、「暁月」詩における秋の月の夜の蜘蛛は『凌雲集』『経国集』の漢詩を受け継いだものである。これらの蜘蛛詩は、月の光に照らされて輝いている繊細な蜘蛛の糸を描写したり、蜘蛛の網に光る白露を詠んだり、〈花びらをつけた蜘蛛の網—帷〉〈蜘蛛の網にかかる露—緒を貫き通した玉〉の見立てを駆使したりして、技巧的耽美的詩の世界を創り上げている<sup>16)</sup>。ところが、『経国集』の詩に詠まれた蜘蛛の網の薄さは他には例を見ない<sup>17)</sup>。今まで見てきた通り、平安初頭の日本漢詩における蜘蛛の糸の形容「乱・軟・寸寸分分断尽・薄」は何れも中国詩の伝統的な表現から外れるものといえる。しかし、蜘蛛の糸がクローズアップで精緻に描かれるところにこそ、王朝人の独特の美意識を端的に見出すことができる<sup>18)</sup>。

そして、糸を乱れる心に喩える表現が日本漢詩に違和感なく受容されえたのは、古来の伝統的な観念に支えられたからだと考えられる<sup>19)</sup>。万葉集においては、

玉の緒を片緒に繕りて緒を弱み乱るる時に恋ひずあらめやも

(巻十二・3081・作者未詳)

生の緒に思へば苦し玉の緒の絶えて乱れな知らば知るとも

(巻十一・2788・作者未詳)

のように、「玉の緒」は人の命であるという和歌的理解を踏まえて作られた「玉の緒…弱み乱る」「玉の緒の絶えて乱る」等の表現が古来存在している<sup>20</sup>。このような伝統的な発想があったからこそ、中国詩の「乱・断・糸・緒」の縁語的表現は王朝人に特に好まれ、大いに発展を遂げたのであろうか。

### 三. 断れた蜘蛛の糸への好尚—和歌との関わり

「暁月」と上恋 108 は、「蜘蛛縷・蜘蛛」の措辞、蜘蛛の糸と心情が重なり合うこと、蜘蛛の糸が切れて乱れてしまうことにおいて共通する。前述したように、中国詩に詠まれる断腸の思いを象徴する切れた糸は殆ど繊維や青柳の糸に限られて、風雨に打たれて破れた蜘蛛の糸を詠んだ漢詩は極めて少ない。

其布則細絺弱折、錦繭成<sub>レ</sub>衽、阿麗織靡、避<sub>二</sub>晏與陰<sub>一</sub>、蜘蛛作<sub>レ</sub>糸、不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>見<sub>レ</sub>風<sub>一</sub>。

(『全上古三代秦漢三国六朝文』全漢文・卷五十一、西漢・揚雄・蜀都賦)  
雨中雀語喧<sub>二</sub>江樹<sub>一</sub>、風処蛛糸颺<sub>二</sub>水潏<sub>一</sub>。

(『全唐詩』、中唐・李紳・端州江亭得<sub>二</sub>家書<sub>一</sub>)

糸網張<sub>二</sub>空際<sub>一</sub>、蛛繩繞<sub>二</sub>瓦溝<sub>一</sub>。

(『全唐詩』、中唐・姚合・酬<sub>二</sub>任疇協律夏中苦<sub>レ</sub>雨見寄<sub>一</sub>)

分從<sub>二</sub>珠露滴<sub>一</sub>、愁見<sub>二</sub>隙風牽<sub>一</sub>。妾意何聊賴、看看<sub>二</sub>劇断弦<sub>一</sub>。

(『全唐詩』、晚唐・趙嘏・昔昔塩<sub>二</sub>十首之暗牖<sub>二</sub>懸蛛網<sub>一</sub>)

とあるように、蜘蛛の糸が風に吹かれる場面は詩の題材として珍しく、一つのパターンとして定着していない。例えば、『蜀都賦』で蜘蛛の糸を細くて断ち切れやすいものとしてとらえるが、それは繊細な蜀布の喩えであり、心の喩えではない。ほかは殆ど叙景詩で、蜘蛛の危うい境地を詠んでいないし、心情と直結するものでもない。表現的に一番近い趙嘏の閨怨詩は、断ち切れた蜘蛛の糸をじっと見詰めるのは暇を潰すためなので、蜘蛛の糸が待つ女自身の暗喩とし



て使われているとは思えない。また中国詩に偶然みられるこの一例は、上恋 108 と「暁月」に直接的に影響を与えるとは考えにくい。すると、心情の象徴として詠まれた弱くて断ち切れやすい蜘蛛の糸のイメージがどこに由来したのかが問題となる。十世紀以前の日本詩歌に目を転じると、道真には、

微虫猶有<sub>レ</sub>巧、結<sub>レ</sub>網自含<sub>レ</sub>情。稟<sub>レ</sub>氣安<sub>レ</sub>身小、隨<sub>レ</sub>風転<sub>レ</sub>質輕。

簷前寛得<sub>レ</sub>地、籬上暫全<sub>レ</sub>生。万物皆如<sub>レ</sub>是、応<sub>レ</sub>知造化成。

(『菅家文章』416・蜘蛛)

といった蜘蛛の自然の理にかなった生き方を褒める詩がある。風に吹かれて不安の中で暮らしている蜘蛛のイメージは、上恋 108 と「暁月」に共通するところがある。また、古今までの和歌をも視野に入れると、切れやすい蜘蛛の糸を詠んだ和歌は次の一首しかない<sup>21)</sup>。

夕暮に、蜘蛛のいとかなげにすかくをみはべりて、常より

もあはれにはべりしかば

さゝがにの空にすかくもおなじことまたき宿にもいく世かはふる

(遍昭集・14)

この歌は、目の前にある蜘蛛の巣に思いを寄せて、人が立派な邸を建ててもそこに何代住めようかと嘆いている。風に吹き破られたわけではないが、空で巣を掛けている蜘蛛の細い糸が切れそうに見え、非情な運命に翻弄された人間の姿を思わせる。遍照は仏典からこの発想を獲得しただろうと思ったが、調べた限り、仏典には切れやすい蜘蛛の糸の用例は意外に見当たらない<sup>22)</sup>。蜘蛛の糸の切れやすいイメージが当時の社会でどのくらい普及していたのかは推定しがたいが、少なくとも詩歌表現としてそれほど一般的なものではないといえる。遍照の歌には、上恋 108 と「暁月」詩の表現に直接の影響を与えたと思し得る

措辞は見出し難いにもかかわらず、上恋 108 と「暁月」における切れやすい蜘蛛の糸を人事に重ね合わせる手法は、遍照の歌に触発されたものと考えられる。<sup>23</sup>

時代を下るが、十世紀半ば以後、切れやすい蜘蛛の糸によって、はかなくて心細い心情を表す描き方は集中的に男女の贈答歌に現れたのである。これらの恋歌は、切れやすくはかない蜘蛛の糸への心情的共感を基盤とし、掛詞・縁語等を駆使して男女の仲や女の生の侘しさを表現している。

つらかりけるをとこに

たえはつる物とは見つゝさゝがにのいとをたのめる心ほそさよ

(後撰集・巻九・恋一・569・読人しらず)

つらかりける男のはらからのもとにつかはしける

ささがにの空にすがける糸よりも心細しや絶えぬと思へば

(後撰集・巻十八・雑四・1295・読人しらず)

返し

風ふけはたえぬとみゆるくものいも又かきつかてやむとやはきく

(後撰集・巻十八・雑四・1296・読人しらず)

男の、文多く書いてと言ひければ

はかなくて絶えなん蜘蛛の糸ゆゑに何にか多くかかんとぞ思ふ

(後撰集・巻十六・雑二・1139・読人しらず)

つねならぬ身はささがにのやどなれやあまつ空なるたのみかくらん

(古今六帖・第六・くも・4021・作者未詳)

上記の四首の『後撰集』の歌が何れも「断つ」という語を用いることから、蜘蛛の糸の切れやすくはかないイメージは十世紀半ばに和歌の世界でようやく定着するようになることが了解される。平安朝の女性はうつろいやすい男の愛に不安を抱いて空しく待ち続けるうちに、不安定な蜘蛛の巣から「つねならぬ身」の境遇を連想し、深い共感を覚えている。歌に詠まれる蜘蛛は、夫のいな

い荒れ果てた宿の象徴や夫の訪れの前兆や頼みにされる存在だけでなく、蜘蛛の糸の「風ふけば断えぬ」を男の訪れの「絶え」に、糸の「細し」を心細さに掛けることより、弱い立場に押し込められている女たちの心情を象徴している。<sup>24</sup> ちなみに、蜘蛛の糸の「細し」が「心細し」に掛かるのは、道真の「秋腸軟自蜘蛛縷」の発想に近い。また、「蜘蛛の糸が切れてまた継ぐ」という表現は、前掲した白詩と孟郊詩の「(糸) 猶有却続時・雖断猶牽連」を思わせる。蜘蛛の糸の断ち切れやすさは遍昭歌に詠まれ始めたが、『古今集』には見られず、十世紀後半以後恋歌の常套表現として定着していく。そうした意味において、上恋 108 と道真詩は日本漢詩の世界においてかなり先駆的な表現といえる。<sup>25</sup>

なお、十一世紀初頭に成立した『枕草子』の第 130 段「軒の上に、かいたる蜘蛛の巢のこぼれ残りたるに、雨のかかりたるが、白き玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ」では、風雨に打たれて破れた蜘蛛の糸は風情のあるものとして詠まれる。この景物描写は「全からざるものを愛惜する美学」が反映されると言われている。<sup>26</sup> こうして考えてみると、道真と遍照はこの美意識に基づくからこそ、切れそうな蜘蛛の糸を詠み始めたのであろう。

### おわりに

『新撰万葉集』上恋 108 と道真の「暁月」における蜘蛛の糸は「糸・断・乱・軟」の縁語で織り成され、心情の喩として詠まれている。この糸の縁語的表現は本来六朝詩や白詩に由来したが、「青柳の糸・繊維の糸」を蜘蛛の糸に置き換えることによって、中国詩にはない新たな表現が作り出されている。また、中国詩に稀に詠まれる蜘蛛の糸の切れやすさは、遍昭歌、道真詩及び上恋 108 の漢詩に詠まれ始め、十世紀後半の和歌より新しい方向を先んじて獲得したのである。風雨に断ち切れそうな蜘蛛の糸、及びそれに託された弱い心情は、日本的繊細で哀愁的な美的情趣を帯びている。平安初期の日本漢詩における蜘蛛の糸の描写は、全体的に言うとも蜘蛛の糸をめぐる言葉の連想が好まれ、蜘蛛の網を美しく精緻に描く傾向がある。

こうして、九世紀末の日本漢詩は国風意識の高まりに伴って、単なる中国詩の模倣にとどまらず、自国の嗜好にひかれて独自の道を切り開いていく。なお、上恋 108 と「暁月」詩における蜘蛛の糸の表現はほかに類例が殆どないことから、両者の関わりの深さが知られよう。

#### [注]

- ①小島憲之氏は「万葉集の編纂に関する一解釈——菅原道真撰の説によせて——」（万葉集研究 1、1972 年）で上巻の漢詩が道真とその門人によって作られたものという。一方、木越隆氏は「新撰万葉集上巻の漢詩の作者について」（国語 4-4、東京教育大学、1956 年）で用語の使用頻度や表現技法等の角度から道真説を否定した。
- ②三木雅博『平安詩歌の展開と中国文学』「句」字と「にほふ」——菅原道真と和語の漢字表記——（和泉書院、1999 年）、高兵兵「菅原道真の比喩表現と和歌——日中詩歌比較の視角から」（和漢比較文学 32、2004 年）等参照。
- ③『新撰万葉集』の引用は『新撰万葉集注釈』（新撰万葉集研究会編、和泉書院、2005 年）による。
- ④泉紀子「新撰万葉集における漢詩と和歌」大阪女子大文学国文編、1981 年、64 頁。
- ⑤『新撰万葉集注釈』（477 頁）は「蜘蛛」の用例が見出せず、乱れ物の比喩として糸が使われるので、糸の類から「乱れ」が連想されたと注した。本集の下秋 192「蜘蛛柯懸似飛鬚、可惜往還冬不來」と下恋 236「荒室蜘蛛人無挑、暇閑簾内衾不收」にも「蜘蛛」の語が用いられている。なお、「心如繰糸綸、展転多頭緒」（『全唐詩』、鮑溶・秋懷五首）には「糸綸」という語が見える。
- ⑥上恋 108 と「暁月」詩の成立時期を考えて、本稿は唐代までの中国詩を考察対象とする。蜘蛛の用例の調査は、『全上古三代秦漢三國六朝文』（中華書局、1958 年）『先秦漢魏南北朝詩』（中華書局、1983 年）『文選』『玉台新詠』（『新釈漢文大系』明治書院）『芸文類聚』（中華書局、1965 年）『全唐詩』（中華書局、1960 年）及び『文淵閣四庫全書電子版』（迪志文化出版、2005 年）を中心に行った。
- ⑦調べた限り、〈蜘蛛の糸が乱れている〉と詠んだ詩は次の一首しか見出せない。「暗中蛛網織、歷亂綺窗前」（『全唐詩』、趙嘏・昔昔塩二十首之暗隔懸蛛網）は蜘蛛の糸が窓に雑乱に巻き付いている様を描いて、女の独り暮らしの寂しさを表現する。趙嘏は晩唐の詩人で、氏の詩句は十三句ほど（当詩が含まれない）『千載佳句』に収められたので、氏の詩集が当時日本に伝わった可能性がある。しかし、「歷亂綺窗前」は目の前に見える具象的な風景で、心情表現を融合した「蜘蛛乱」とは異なる。また、本集にはほかに「蓬草乱」「閨裏乱」の類似表現があることを合わせて考えると、上恋 108 の根拠をこの稀な一例に求めるのは無理がある。
- ⑧『新撰万葉集注釈』（442 頁）で上恋 103 の「閨裏乱」は心が乱れることをいうと指摘したが、「蓬草乱」と「蜘蛛乱」も心の乱れを表すことについて触れない。
- ⑨晩唐張祜の「愁見蜘蛛糸、尋思直到明」（『全唐詩』讀曲歌）のような蜘蛛の糸が「思」に掛かる例があるが、極めて珍しい。しかも、上恋 108 は「蛛糸」でなく「蛛綸」とあるならば、「思・糸」の双関語（掛詞）が機能できなくなるであろう。
- ⑩『菅家文草』の本文は川口久雄校註『菅家文草・菅家後集』（日本古典文学大系 72、岩波書店、1966 年）による。なお、訓み下し文は一部改めたところがある。
- ⑪白詩の用例は『白氏文集歌詩索引』（平岡武夫、同朋舎、1989 年）によるものである。
- ⑫波戸岡旭氏は「菅原道真詠月考」（漢文学会・報 37、1991 年）で「暁月」詩の蜘蛛は実景として鑑賞できるし、心象風景としてとらえることもできると述べた。
- ⑬川口久雄氏は前掲書で（385 頁）当詩の「蜘蛛縷」を「遊糸」と理解した上で、「寸寸分断尽

遊」を遊糸がたちきれて大空いちめんにかぶ実景としてとらえた。遊糸は飛行する蜘蛛の吐く糸である。漢詩文では、遊糸は普通春の昼間の景物として詠まれるが、秋の夜を背景とした「暁月」詩に合わない。したがって、道真詩に描かれる「蜘蛛縷」を遊糸でなく普通の蜘蛛としてとらえていきたいと思われる。

- ⑭「糸・思・乱」の縁語的表現はいち早く上代の日本漢詩に取り込まれている。「楊柳正乱糸、春深攀折宜」(『文華秀麗集』69、嵯峨天皇・折楊柳一首)「舞袖欲縫糸屢脱、音書未寄怨愈頻」(『経国集』125、滋貞主・雑言臨春風效沈約体応制)とあるように、道真以前の日本漢詩に詠まれた「乱糸」は「青柳の糸・繊維の糸」の域を出ていない。
- ⑮秋の月の夜を背景にした中国の蜘蛛詩としては、「落葉驚秋婦、高砧促暝機。蜘蛛尋月度、萤火傍人飛」(『全唐詩』、沈佺期・雑詩三首)が挙げられる。
- ⑯ほかには、島田忠臣に「反照光生向—晚颺—、蜘蛛網□浪花時」という蜘蛛詩がある。これらの蜘蛛詩の耽美的で技巧的な詠みぶりは『古今集』の「秋の野に置く白露は玉なれや貫きかくる蜘蛛の糸筋」(巻四・秋上・225・是貞の親王の家の歌合による・文屋朝康)「白露を玉に貫くとやささがにの花にも葉にもいとをみなへし」(巻十・物名・437・紀友則・女郎花)に通じている。上恋108と「暁月」詩はこの蜘蛛の題材の流行を背景として生まれてきたのである。
- ⑰「虫網薄」は「月光涼」とともに荒廃した家の形容であり、待つ女の心細い心情に掛かっていると思えない。
- ⑱小島憲之氏は『田氏家集注』(和泉書院、1994年、368頁)で、中国詩における蜘蛛の賦詠が少なく、蜘蛛の網の妙工を讃嘆するものと、蜘蛛が殺生を事とするのを借りて小人を諷するものの二つの類型に大別され、後者が比較的多く見られるという。一方、岩下均氏が「古典文学の蜘蛛」(目白学園国語国文学9、2000年、9頁)で「王朝びとの感覚では、蜘蛛の巣は雅びな景物」と指摘したように、平安朝の詩歌における蜘蛛の詠み方は、蜘蛛の殺生や毒性を多く詠んだ道徳的な寓意性が強い中国詩と鮮明な対照をなしている。なお、古今までの道徳的意義を有する蜘蛛詠は「甲蛛蝥網、鏡蟪螟騎」(『三教指帰』仮名乞児論・空海)「触之不漏、蛛糸設黏虫之禍」(『本朝文粹』巻八・197、小野篁・令集解序)の二例しかなく、しかも散文の場合に限られているようである。
- ⑲『文華秀麗集』『三教指帰』『万葉集』『古今和歌集』『枕草子』は『日本古典文学大系』、『本朝文粹』は『新日本古典文学大系』、『凌雲集』『経国集』は『群書類従』による。他の引用和歌は『新編国歌大観』(角川書店)に従った。なお、一部表記などを改めた部分がある。
- ⑳毛利正守、原岩魚氏は「同音読の掛詞「糸・思」について」(万葉80、1972年)で万葉歌と楽府詩の「糸・思」の発想上の類似について検討した。本稿はこの両者が別々に成立したと考える。
- ㉑当歌はまた『新古今集』(巻十八・雑下・1817・僧正遍昭)に収められる。歌の詞書を「夕暮に、蜘蛛のいとかなげにすがくを、常よりもあはれと見て」、第五句を「いく世かはへむ」とする。
- ㉒仏典における蜘蛛の用例の調査は、「大藏経テキストデータベース」(<http://21dzk.lu-tokyo.ac.jp/SAT/ddb-sat2.php>)を基に行った。
- ㉓「暁月」詩は遍昭が亡くなった翌年に作られた。
- ㉔『古今集』にある衣通姫の歌「我が背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」(巻十四・1110・そとほり姫のひとりるてみかどをこひたてまつりて)は蜘蛛の恋歌の先蹤である。鈴木裕子「紫の上の和歌覚書——「ささがに」をめぐって」(駒沢短大国文27、1997年)参照。
- ㉕上恋108における「蜘蛛縷」に近い和歌の表現は、天祿三年(973)の『蜻蛉日記』の道綱と大和の贈答歌において見られる。「くものかくいとぞあやしき風吹ばそらにみだるゝものとしるしる」(大和)とある。
- ㉖堀誠「蜘蛛のいろいろ——日本と中国の文学」早稲田大学教育学部学術研究48、2000年、113頁。

## \* 討議要旨

村尾誠一氏は、縁語的表現というものが六朝詩や白詩といった中国の漢詩に見られるということだが、中国の詩学ではこの技法をあらわす用語があるのかと質問した。発表者は六朝詩や白詩にこうした技法は見られるが、これを表す用語はない。また、もともと縁語というのは和歌の技法であるため、「縁語表現」ではなく、「縁語的表現」という言い方を発表では使用したと回答し、ただ、掛詞によく似た相関語という用語はあると補足した。村尾氏はそれに対し、掛詞と縁語は併用されることも多いので、相関語といっても掛詞とは質的な違いがあるかもしれないと述べ、また、用語がないということは、どれだけ意識して使っていた技法なのかということも興味深い問題であり、それについても探究してほしいと述べた。坂本信道氏は発表でとりあげた道真詩の表現は、その後、他の漢詩や和歌などに広がっていくのかと尋ねた。発表者は切れやすい蜘蛛の糸という表現は十世紀半ば以降、恋の歌に詠まれるようになっていくが、乱れる蜘蛛の糸を断腸の思いに喩えるという表現はかなり珍しいものと思うと述べ、また『新撰万葉集』の蜘蛛の糸が乱れるという表現については和歌では十世紀半ば以降の恋の歌に少しずつ見られるようになっていくが、中国の漢詩にも日本の漢詩にもあまり見られない表現であると答えた。坂本氏はそれを受けて、道真に特徴的な表現というのであれば、『新撰万葉集』漢詩の作者を道真とする根拠となるが、他に道真の作であることを示す根拠はあるかを質問した。それに対して発表者は、『新撰万葉集』の漢詩の表現には他にも道真特有のものが少なくないと思うが、今後の課題として残しておきたいと回答した。